

作家

篠田節子さん

SETSUKO SHINODA

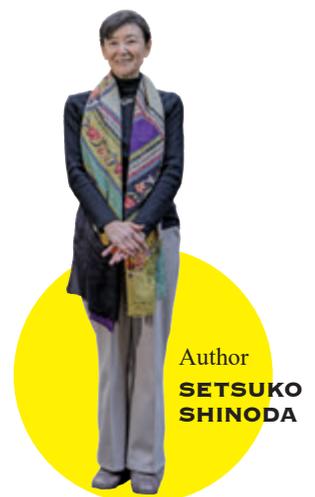
「しのだ・せつこ」1955年、東京都出身。東京学芸大学卒業後、八王子市役所に入庁。1990年『絹の愛容』で小説すばる新人賞を受賞し、退職。1997年『ゴサイタン』神の座』で山本周五郎賞、同年『私たちのジハード』で直木賞、2009年『仮想儀礼』で柴田錬三郎賞、2011年『スターバトマーテル』で芸術選奨文部科学大臣賞、2015年『インドクリスタル』で中央公論文芸賞、2019年『鏡の背面』で吉川英治文学賞を受賞。近著『セカンドチャンス』では、長年親の介護をしていた女性が自身の人生を取り戻す姿を描いている。

35歳で転身。作家として
ゼロから創造し続ける



INTRODUCTION

世の中に作家はあまたいれども、編集者が列を成すほど、となると限られるらしい。篠田節子さんは35歳でデビューして以来、今日に至るまで人気作家として数多くの作品を発表し続けてきた。その作品は直木賞をはじめ数々の賞にも輝いている。2020年には紫綬褒章も受賞された篠田さんに、市職員だった頃の話から、作家になられるまでの経緯、作品づくりに懸ける思いまで話を伺った。



Author
SETSUKE
SHINODA

——篠田さんは、教員養成のための大学である東京学芸大学のご出身だそうです。もともと教員を目指されていたのですか。

中高生の頃の私は、世の中にどんな仕事があるのか、具体的なイメージがつかめていませんでした。父は織物業を営んでいましたが、それ以外の仕事、例えばサラリーマンと言ってもどんな仕事をするのかよくわからなかったんですね。進路を決める時、自分の中でイメージがつかめる仕事という理由で、何となく教員になろうと考えました。——大学時代、教育実習に行った時に自分は教員に向いていないと気づかれたとか。就職活動はどうされたのでしょうか。

民間企業からの求人がない大学だったので、教員にならなければ、公務員以外に道がありませんでした。専攻の学校教育科で学んだ教育心理学の知識を生かすとすると、裁判所の調査官か国家公務員の心理職しか選択肢がなかったのですが、どちらも採用試験で落ちてしまいました。

ただ、地方自治体の行政職にはいくつ

合格することができ、その中から一番実家に近く、徒歩か自転車を通えるということ、八王子市役所に入庁しました。一人っ子だった私に、両親はできるだけ近くにいたいことを希望していましたから。

——何かやりたい仕事はあったのですか。

役所にどんな仕事があるのか具体的なイメージがありませんでしたので、漠然と自分が専攻した学科と関連しそうな社会教育関係に行けたらいいなとは思いましたが、新人が希望した部署に行けるわけではないですからね。最初は福祉事務所、大卒の女子としてはごく一般的だった庶務係に配属されました。

——仕事は面白かったですか。

興味を持って取り組めば、役所に限らず庶務や経理という仕事は組織や社会の実態

が見えてきて、面白はずなのですが、大学を出たばかりの私には、それがわからなかったんですね。嫌で嫌でしょうがなく、今考えると、なんて勿体ないことをしたのだろうと思います。

——仕事に興味を持ってない中、どのように楽しみを見つけたのですか。

大学を卒業して2年くらいはまた学生時代の友達と交流がありましたから、一緒に美術館を回ったり、音楽を聴きに行ったりしていました。ところが、卒業して3年も経つと、それぞれの世界が出来てきて「私だけ何をやっているんだろう…」という焦りが出てきました。

——焦りというのは？

学生時代、他大学の友達と親しくしていたのですが、彼女たちは卒業後、新聞記者

「私だけ何をやっているんだろう…」
という焦りが出てきました。



として飛び回ったり、美術館の学芸員として企画を任されたりしていました。24〜25歳の女性となれば会社の顔、組織の顔として華やかな活躍をしている人もいましたので、その姿と比べて「福祉事務所で毎日伝票を書いている私って何なのよ」という気持ちでした。仕事への熱意もないから失敗だらけでしたし、「自分一人だけ置いていかれたな」と焦りを感じていたのです。

——華やかに憧れる年頃でもありませんよね。それで次はどこに配属されたのですか。
 教育委員会施設課に異動し、学校の建設と修繕を担当することになりました。そこで宅建の資格を取る勉強でも始めようかと

考えていたところ、思いのほか早く図書館へ異動となり、市立中央図書館の立ち上げに事務職として携わることになったのです。

——そちらでの仕事はいかがでしたか。

新しく市立中央図書館を立ち上げようという時期でしたから、業務量が半端なかつたですね。数千冊の本を購入しますので、伝票処理だけでも尋常ではありません。コンピュータシステムもまだ開発段階でしたから、バグだらけでまともに動かないし、トラブルが起きてばかり。深夜まで仕事するのが当たり前というハードな労働環境でした。開館後も市民が詰め掛けるような状況で、明らかに職員のキャパシティを超えています。

した。落ち着くまでに5〜6年かかったと思いますが、私はある程度落ち着いたところで、保健予防課に異動となりました。

——図書館に配属されて本が好きになり、作家を目指そう思われたのですか。

図書館の仕事は、本が好きだからできるというものではなく、むしろ接客。力仕事や事務作業も多い職場です。

——では、どうして小説講座に通われることになったのでしょうか。

図書館勤務では、月曜と隔週日曜が休日になりました。毎週休めるのは月曜しかないので、せっかくなら資格でも取ろうかとカルチャーセンターの講座をいろいろ探していたところ、小説講座を見つけたんですね。文章力が上がれば、役所の広報課に異動できるかもしれない、あるいは役所を飛び出して、当時、若い女性たちが記者として活躍していた地元のコミュニティ紙の仕事に就けるかもしれない。そんな期待を抱いて講座に行ってみたら、「ウチは文章講座じゃありません」と言われたのです。

——小説講座と文章講座は別物だったということですか。

そうです。しかも、直木賞作家が講師を務められていて、「私は小説家だから、皆さんに講義をするつもりはない。作品を書いて持つて来なさい。講評しますから」と。それで、いきなり小説を書くことになりました。小説を書く時の原稿用紙の使い方すら知らなかったのに。

小説なんて一度も書いたことがなかったけれど、 友達関係も含めて楽しさにハマっていきました。

——それにもかかわらず、小説講座をやめなかったのは、なぜなのでしょう。

各自が書いてきた作品を先生が講評するのですが、そのうち仲良しグループができ、当時30歳そこそこだった私はおば様方に可愛がられたり、そこでの友達関係がそれまでにないくらい楽しかったのです。

——学校でも職場でもないところに、新しい居場所ができた感じでしょうか。

そんな感じでした。小説なんて一度も書いたことがなかったけれど、友達関係も含めて楽しさにハマっていきました。

——小説を書くこと自体も楽しくなっていたのですか。

グループの中で、大胆にも講談社の「小説現代新人賞」に作品を応募するメンバーがいて、「だったら、皆でデビューを目指そう！」という話になりました。皆、自分の書いたものが、どの程度の偏差値なのか試したかったんですね。各出版社の新人賞に応募すると、一次選考で落ちるか、二次選考で落ちるか、最終選考に残るか、自分の力がわかるわけです。それも、編集者やプロの作家が客観的に評価してくれるのです。

——小説講座ではどのような指導をされていたのでしょうか。

生徒から見れば、文章がすごく凝っていて良いと思うような作品は評価されなくて、逆に「えっ？」と思うような作品が「これいいね。この感じで書いていきなさい」と。最初から興味感覚ではなく、一流のプロに

見てもらって、プロを目指す仲間たちに囲まれていたことは良かったと思います。

——プロの作家としてやっていけると思われるまでには、どのくらいかかりましたか。

カルチャーセンターの小説講座が1年半で終了した後、仲良くしていたメンバーに誘われて、別の小説講座に通うようになりました。そこには広告代理店のコピーライターなど、レベルの高い生徒が集まっていた。各出版社の文芸誌で発表される新人賞の選考通過者を見ると、同じ小説講座の仲間の名前が載っていて、最初のうちは「自分の名前も活字になったら嬉しいな」くらいの気持ちでしたが、次第に「自分も新人賞をとれるかもしれない」と野心を抱くようになっていきました。

——本気で小説に向き合うようになっていかれたのですか。

仕事と家事を両立しながらで、時間が無かったため、昼休みに一人で近くのファミレスへ行き、小説の構成案やストーリー展開をメモしたり、朝、出勤時間のギリギリまで自宅で原稿を書いていました。その頃には二次選考にも残るレベルになって、目指す方向が現実として見えていました。

——プロの作家としてやっていけると。

そうですね。編集者からも直接連絡を頂くようになっていましたから。

——それは新人賞をとられる前ですか。

今で言うライトノベルや新書判ミステリーのジャンルでは、新人賞をとらなくても

デビューできる道があったんです。新人発掘のため小説講座にやって来る編集者から「これを書き直して、本を出さないか」という話も頂いていましたので、私は小説する新人賞を受賞してすぐ、35歳の時に作家一本でやっていこうと決めました。

——二足の草鞋を履く作家もいますが、その道は考えられなかったのでしょうか。

新人賞を受賞しても翌年にはもう他の方が受賞しますし、受賞後に新刊を出さなければすぐに忘れられます。注文が来て、作品を書いたところで必ず採用してくれるものでもありません。次々と新人がデビューする中で、最低でも年に2〜3冊は新刊を出さないと生き残れないわけです。山ほど作品を書いていかなければならないのに、1日8時間働いていられますか？ という話です。

——それほど入れ替わりが激しく、厳しい世界に入られることについて、ご自身の不安やご家族の反対はなかったのですか。

親からは「なぜ、役所を辞めるんだ」と言われましたし、作家になってからも「いつになったら、作家を辞めるんだ」と言われ続けました。夫は「まあ、いいんじゃない」という感じでしたけどね。

いつかこんなこともあるのかと、自分の給与を貯金していたことも、作家一本でやっていく後押しとなりました。というのも、当時は専業主婦がスタンダードな時代でしたから、正職員として働いていても、家族

新しい物を創つていくためには、昨日の自分の焼き直しを出すわけにいきません。

に何かあれば、女性は仕事を辞めなければいけなかったですし、そうなった時、夫の給与だけ暮らしていけなければ困ると思い、自分の給与はきちんと貯めていました。

——そういう安心材料があったのですね。

バブル経済の真っ只中、親類が証券会社に勤めていた関係で自分の給与を投資信託で運用していましたから、貯えもある程度ありました。それに私はブランド物にも外食にも興味がなく、あまりお金を使いませんから、収入が無くても4〜5年くらいなら食べていけるだろうという計算でした。

——プロの作家となり、朝からずっと書く生活は苦痛ではありませんでしたか。

この世界で生き残れるかどうかは、いかに多くの作品を書けるかどうかにかかっています。最初の5年は作品がボツにされても楽しくて、いわゆるライターズハイの状態でした。せつせと書いてもボツにされていたとは言え、ボツにする出版社があれば、拾ってくれる出版社もあります。年に2〜3冊は確実に新刊を出せましたので、不安というよりも楽しかったですね。

——書くことへの向き合い方に変化はあったのでしょうか。

プロになると考えた時から、ある種の

開き直りが出てきました。素人だった頃は、深遠なテーマで、文章を磨き上げていくのが作家の仕事だと思っていました。それがプロになってからは、「品は悪くても、話が転がすのが小説なんだ。話が転がらなければ、話にならない」と自分の中の文学観が変わりました。ただただ楽しく書いていくという点は、今も昔も変わりませんけどね。

——公務員時代と比べて、仕事への向き合い方に変化はありましたか。

公務員の仕事はある意味、減点主義ですから、とにかく間違いないようにしなければなりません。一方、作家の根本に求められることは創造する力です。新しい物を創っていくためには、昨日の自分の焼き直しを出すわけにいきません。常に新陳代謝をさせつつ、技術的な面ではクオリティを高めていく、この2つが作家に必要なことだと考えています。

——篠田さんは毎回違うテーマで書かれるそうですが、となると負担も大きいのでは？

そうですね。不得意分野もありますし、ゼロから調べていかざるを得ないことも多いですが、作家にとって一番怖いのは自己模倣に陥ることです。自己模倣でもしばらくは商業的にやっていけるかもしれませんが、

いずれ書けなくなっていくんじゃないかと。ですから、長い目で見れば、常にゼロから新しい物を創り出していかなければならぬのだと思います。

——公務員時代のスキルや経験で、現在の仕事に生かされていることはありますか。

ストーリーを書く上で法令や規則、組織の有り様を意識できたり、自分で調べられるおかげで、作品が絵空事にならずに済んでいるという点では、公務員時代のスキルが生かされています。例えばミステリー小説を書いている時、それが法律的に可能なストーリーかどうか、自分でチェックできますからね。

私の作品の登場人物は、社会の中でごく普通に生きている人たちです。人物の設定や描写にリアリティを持たせるには、普通の人々の感覚が欠かせません。小説を書いている時には、読者が「この登場人物が働いている組織で、こんなことあり得ない」など違和感を持たないか絶えず意識しています。そういう感覚や世の中を見る目を持っているのは、公務員時代に身につけた暗黙知や社会の常識があるからでしょう。

——なるほど。だから、篠田さんの作品はまるで自分事のように読めるのですか。

私は市役所の福祉部門から入って、教育委員会、図書館、保健予防と異動しましたが、市町村職員の良いところは、広い分野の仕事を通して世の中のさまざまな部分が見えてくることです。公務員という公務員だ

情報と知識を常にアップグレードしていく必要はあるでしょうね。

けの世界に生きてるように思われるかもしれませんが、民間事業者とのやり取りもありますし、その気になれば、いろんな世界が見えてきます。そういった点では、当時の経験が今の仕事にとっても役立っています。

それに、市役所を退職した後もお付き合いが続いている同僚もいます。彼女たちと日常的に話すことによって、世の中の人々の感覚が自然に流れ込んで来るので、それも非常にありがたいですね。

——作家としてやりがいを感じるのは、どんな時ですか。

10年前、20年前の作品を読んで、未だに何かを感じてくださる方がいると分かった時です。一時もてはやされたら、後は読み捨てられていくのではなく、昔の作品を読んで面白かったと言ってくれる人がいると、それだけの時間に耐えられたなど、やりがいを感じます。「時の風化に耐えていく作品を創りたい」というのが私のこだわりです。今書いている作品がどれだけ長くもつだろうかということは意識していません。

——篠田さんは認知症のお母さまを介護されたり、ご自身のがんの闘病もされながら、30年以上にもわたり作家として第一線で活躍されていますが、それができている要因は何だとお考えですか。

新しいテーマを探して、勉強して、書くというサイクルが、毎日の生活時間の中に組み込まれていることだと思います。

母が認知症になってからは一日のうちに



幾度となく電話がかかってきましたが、そんな時も母の話を「はい、はい」と聞きつつ、片手で小説のアイデアやストーリーをメモしていました。一旦思考が途切れると、忘れてしまいますからね。どんな状況に置かれても立ち止まらない。それが一番の要因ではないでしょうか。

——変化の激しい時代、人生の長期化に伴い就業期間も長くなる中で生き抜いていくためには何が必要だと思われますか。

情報と知識を常にアップグレードしていく必要はあるでしょうね。学び直しという

御大層な言葉を使わなくても、日常生活の中に学習と練習を習慣として取り入れていくことです。仕事に直結した知識だけでなくスポーツでも音楽でも構わないので、いつでもアップグレードできる素地は、自分の中で作っておくべきではないでしょうか。

——学生時代、習慣的に学習できていた人でさえ就職するとそこで安心してしまったり学習することを忘れてしまいがちです。

昔ならそれで済んだのですが、今は人間の仕事がAIに取って替わられる時代です。では、何が人間の仕事として残るのかと言えば、何かを創り出すことだと思います。それは、どんな仕事であっても求められるでしょう。地道にルーティンワークをこなしていれば、一生安泰に暮らせる時代ではなくなくなってしまったんですね。

——最後に、篠田さんが人生で一番大切にされていることを教えてください。

人生いろんなことが起きますけれども、その都度自分で判断して、違うと気づいたら速やかに訂正していくバランス感覚みたいなものを、死ぬまで持ち続けられたらと思っています。

加えて、普通の生活基盤と生活感覚を強固に持っていれば、これから先も自分の中に何かを創り出すエネルギーを供給していくことができるだろうと考えています。

——これからの作品も楽しみにしています。お話しいただき、ありがとうございました。

(インタビュアー／ライター 更田沙良)